



失われたファウナ
消閑詩話
富士川英郎

小澤書店

失われたファウナ 消閑詩話

昭和五十五年一月三十日 第一刷發行

著 者 富士川英郎

發行者 長谷川郁夫

發行所 株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二一五—十二 郵便番號一〇二
電話 東京(〇三)二六三—九二一八(代表)

印刷所 精興社 製本所 大口製本

© H. Fujikawa, 1980 Printed in Japan

失われたファウナ
目次

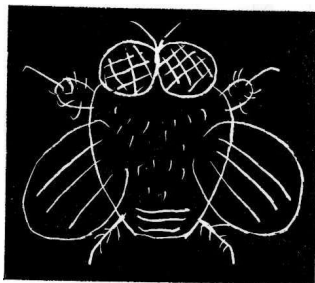
あとがき	鼠の詩	鴉の詩	鶏の詩	虎の詩	獅子の詩	象の詩	蟬の詩	蝶の詩	蛙の詩	蛇の詩	蠅の詩
262	245	211	193	175	135	113	89	69	51	25	7

裝丁・裝畫 串田孫一

失われたファウナ
〔動物群〕

消閑詩話

蠅
の
詩



我打つて醜へり死ぬ蠅あはれ

虚子

老の眼に、とにじみたる蠅を打つ

同

白紙延べ硯に飛べる蠅を追ふ

同

我爲に主婦が坐右の蠅を打つ

同

蠅打を持つて出て来る主かな

同

營々と蠅を捕りをり蠅捕器

同

一しきり蠅打つことも日課かな

同

戦後、われわれの身邊から姿をほとんど消したもののうちに蠅がある。D・D・Tのせいなのか、畠が少なくなったうえに、その畠に人糞をまくことがなくなったせいなのか、いずれにしても、この不潔で、五月蠅くて、さまざまの病原體を傳搬する厄介な昆蟲の群から、わ

れわれの生活が解放されたのは有難いことと言わなければならぬまい。私が永年住んでいる鎌倉あたりでは、ほぼ二十年前から蠅が目だって減り、いまではまったく言ってもいいほど、いなくなったが、これは土地によって多少の違いはあっても、日本全國の大都會とその周辺の地帯に共通して見られる現象であろうと思われる。従っていまの十代や、二十代の前半の人たちには、冒頭に掲げた一連の高濱虚子の句などは、知識として一應分りはしても、そこに詠まれている情景を追體驗することは、もはやほとんど不可能になっているのではなからうか。これらの句は毎年、春から夏にかけて、われわれの家の臺所といわず、便所といわず、また、居間や書齋といわず、到るところをわがもの顔に飛び廻る蠅の群に惱まされていた頃のわれわれの生活のなかから生まれてきたものなのだから。だいいち、「蠅捕器」などというものも、いまの若い人たちはおそらくいちども見たことがないであろうし、ましてそれにさまざまな種類があつて、形體もまちまちであつたことなどは、想像もつかないだろう。また、

蠅打を持つて出て来る主かな

というのも面白い句で、いかめしい家の玄関などではさすがにこんな光景は見られなかった

が、ちょっと立ちよった煙草屋などで内に聲をかけると、蠅を追っている最中であつたのか、主人が蠅打ちを片手に持ったまま、店先きに姿を現わすというようなことは、よくあつたものである。それから冒頭の、

我打つて黽へり死ぬ蠅あはれ

という句は氣魄のこもった句であり、蠅を打つ作者の緊張した顔つきや、そのときの蠅といふしよに疊を打った鋭い音も聞えてくるような氣がするが、この虚子の句を讀んで、對照的にすぐ思ひ出されるのは、

やれ打つな蠅が手をする足をする

という一茶の句だろう。そしてさらにこの一茶の句から次のようなウィリアム・ブレイクの詩を連想するひとも少くないかもしれない。

小さい蠅よ

おまえの夏の遊びを
私の心ない手が
拂い去った。

私はおまえのような
蠅ではないか、
それとも おまえが私のような
人ではないか。

私もおどり
飲んで歌う、
目に見えぬ手が
私の翼を拂うまで。

もし考えることが生命で
また力と息とで、

考えぬことが

死であるなれば、

さらば 私は

幸福な蠅である、

私が生きているとも、

死んでいるとも。

(土居光知譯)

人間によってひどく嫌われ、憎まれている蠅ではあるが、それが障子などにとまって、手足をこすったり、もんだりしているありさまは、なんとなくユーモラスであるとともに、それを見ていると、彼らもまた一切衆生の一員であるというような思いにふと襲われることがある。一茶の右の句はそのような瞬間の感慨を、奇智を交えて、飄逸に歌ったものであり、ブレイクの詩では、「人間もまた蠅である」(或は蠅もまた人間である)という命題に基づく思想が展開されているが、この一茶の句とブレイクの詩とを比較して、嘗て三枝博音氏が面白い考察を述べたことがある。三枝氏はその「感覺の反逆」と題するエッセイのなかで、右の二つのどの詩においても、「人間もまた一びきの蠅ではないか」ということが歌われてい

るが、「ブレイクの詩ではこの一びきの蠅から人を廣い思想の世界へ連れ出してゆく」のに、「一茶の場合では、思想の世界へ人を連れ込むことが淺くて終っている」のはなぜかと問ひ、結局それは、「ブレイクの詩では、蠅を感覺するとき、その詩的感動が率直に、そのまま自然に歌われている」のに對して、一茶はその句で、打とうとした蠅が「手をする足をする」というふうに、それを人間化しながら、剽輕な描寫を以て、小さくまとめてしまっていることによるのだと言っている。その結果、一茶の句では、「一びきの蠅に託して人生觀ではなく、或る道德觀が剽輕のうちに語られている」にすぎないということになってしまったのである。もっとも、短詩型の俳句だからといって、すべてがこの一茶の句のように「無思想」であるのではない。例えば三枝氏も指摘しているように、芭蕉の句は概して思想性が豊かであると言ふことができるが、しかし、一般に右の一茶の句のように、單なる感覺や奇智を以て、小さくまとめられたものが日本の詩歌に多く見い出されることも事實だろう。三枝氏の右のエッセイは、良かれ悪かれ、そういう日本の詩歌の一面の特徴を、西洋の詩歌のそれと對比しながら論じた、さまざまの示唆に富む論文であるが、これは『三枝博音著作集』第六卷（昭和四十八年二月、中央公論社）のうちに收められているので、興味のあるひとはついて見られるがよい。

ところで、蠅が手足をこすったり、もんだりしているところを詠んだものとして、右の一

茶の句とは趣きを異にするが、ほかにもう一篇、いまここで思い出される次のような詩がある。

曉枕覺時霜半晞

曉枕ぎょうちん覺さむる時 霜 半かば晞あく

滿窓晴日已熹微

滿窓まんじょうの晴日 已すでに熹微きびたり

臥看紙背寒蠅集

臥ふして看る 紙背しはいに寒蠅かんようの集るを

双脚掇だ落復飛

双脚ふたあし掇だ落おちて復またた飛とぶ

これは天明から寛政へかけての江戸や京都の詩壇で活躍していた六如上人の詩である。筆者はいまからほぼ三十年前、はじめてこの詩を読んで、一種の驚きに似た氣持をもったことを、いま以て忘れることができない。それは必ずしもこの六如の詩が詩として卓れていたからというわけではなかった。いな、むしろそれ以前の問題として、日本人の作った漢詩と言え、概ね「鞭聲肅肅夜河を過る」とか、「學若し成らずんば死すとも還らず」といったようなものばかりだと思っていた當時の筆者にとって、冬の朝の障子にとまっている蠅の群というような、いわば俳句的な題材が漢詩で歌われていること自體が、先ず珍しかったのである。そしてそれはひとり六如の詩ばかりでなく、他の江戸時代の多くの漢詩を親しみ易いも